



TITLE:

花山天文台の思い出 (4. 花山天文台の思い出)

AUTHOR(S):

堀内, 龍獅虎

CITATION:

堀内, 龍獅虎. 花山天文台の思い出 (4. 花山天文台の思い出). 花山天文台80年のあゆみ : 花山天文台創立80周年記念誌 2009: 150-151

ISSUE DATE:

2009-09-18

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/241407>

RIGHT:

花山天文台の思い出

堀内 龍獅虎
読売新聞社 社友

大阪読売新聞・社会部科学班が京都大学花山天文台（宮本正太郎教授）のスタッフと親しくなったのは、米ソの人工衛星が飛び始めてからだ。最初は流れ星か人工衛星かの区別がつかなかったが、慣れとはおそろしい。

眼視観測の要領を覚えると、望遠鏡で捕らえる方が難しいことが分かった。助手の服部昭（故人）、斎藤澄三郎さんらも、光跡の写真撮影には苦労した。

新聞社としては、各社とも、
「これがソ連の人工衛星の写真」

だとして、朝刊紙面を飾りたかった。

日本内地で最初に収められるのは、経度と日没時間の関係で、花山天文台が最適だった。花山の反射望遠鏡写真のネガは、日頃の付き合いで読売の手に渡された。ここまでは、よかった。

現像は各社の協定で、大阪の本社まで運ばなくてはならない。読売は社旗を立てて待たせていたクルマに、本社までの未現のネガを託した。

競争の激しい新聞社間では、果たしてこのネガが大阪読売の本社まで運ばれるかどうか。疑問に思う記者もいたようだ。某社は協定などは信用できぬと、大阪までの読売のクルマを追尾した。

この騒ぎを一部始終眺めていた人がある。ネガの託送を頼まれた（当時の花山の助手だった）斎藤さんである。

「新聞社の競争意識はすさまじいですネ」

と、斎藤さんもビックリして、京都大学理学部天文学教室の話題をさらった当時のことを記憶している。もっとビックリしたのは、これほどの騒ぎを起こした航跡写真は写っていなかった。

太陽の光を反射して、西から東へ流れるサテライトの姿を、薄暮の空に捕らえられなかったのだ。次の写真は、衛星が地球を一周してくる、90分ほど待たなくてはならない。

締め切り時間が早い朝刊早版用の写真は撮れるのか。今度はそれが気になった。だが、その90分の遅れが幸いした。地球自転の影響で、航跡の現れる高度が高くなった分だけ、はっきりしている。ケガの功名だった。

ここで宮本先生の話。

教授といえば、こわい存在。だが、そうではなかった。見学者にはドームの反射望遠鏡を操作して、土星の輪を見せてくれる。親切で、やさしい先生だった。

先生との仕事上の出会いは、1958年4月に種子島で皆既日食を観測したときだ。周りが開けた小学校庭に、花山から運んだ望遠鏡をセットする許可を役場から取る。

当時はまだ酒の配給制が厳しく、新聞社では、挨拶の名刺がわりに日本酒二本を持参する風習があった。島の人たちが露天で茶碗酒をあおっている姿を見たから、酒なら喜ばれるだろうと思った。翌日、鹿児島市内に戻って特級酒二本を調達し、小学校に届けた。

普通なら、せいぜい一級酒で済ませるが、ここはそうも行かない。無理して特級にしたのだが、島の人たちに大笑いされた。

彼らの飲んでいるのは、地元産の芋焼酎で、日本酒なんかは、お呼びでなかった。太陽の暑さの下、生なりの焼酎は、独特のうまさがあった。

私が焼酎党になったのはこのときから、しかも芋焼酎を好んで飲んだ。戦前の居酒屋で、仕事帰りの職人が引っかけているのは、芋ではなく米焼酎だった。

私が芋焼酎の宣伝をし始めたのは、時期がまだ早かったようだ。焼酎なんて貧乏人が飲むものだ、と馬鹿にされ相手にされなかった。

芋焼酎はサツマイモの切り干しを原料にしているため、その臭みが残る。《通》はこの臭みが芋焼酎の特徴だと納得したが、嫌う人もいた。宮本先生も嫌う方だった。

いずれにせよ、これが焼酎ブームの先鞭になろうとは、物ごととは分からない。種子島の住民は、知っているだろうか。

花山天文台の思い出

前田 耕一郎

元兵庫医科大学教授

花山天文台で出会った人たちとの関わりについて、思い出すままに少し書いてみたい。花山天文台の文字を最初に目にしたのは、中学生のときに郷里の徳島の駅前にあった本屋で天体写真集を見ていたときだったと思う。多くの子供達がそうであるように、私も小さい頃に天体に興味を持った。小学校の頃、星図を持って星座を探した。空は暗く、夏の夜には天の川が良く見えた。流星群があると聞くと、屋根の上に布団を敷き、寝転んで流れ星を探した。中学生のときに、学校にあった屈折望遠鏡で木星をスケッチして、夏休みの課題として提出したこともある。うまくは仕上げられなかったが、キットを買って反射鏡を磨いたりもした。確かにこの頃からは、普通以上の興味を星空に抱いていたに違いない。

私は東京オリンピックの年（昭和39年）に京都大学理学部に入学した。京大を選んだのは、ノーベル賞学者の湯川秀樹などがいた理学部の自由な雰囲気に着かれたからである。入学時には、何かを研究をする生活にあこがれてはいたが、天文学の研究を特に意識していたわけではない。当時の理学部では、2年生から3年生に上がるときに分属があり、どこか専門学科を決めねばならぬことになっていた。その際、いろいろと考えあぐねた末に、小さい頃からの関心が頭をもたげ、宇宙物理学科を選んだのである。周囲からは、天文などやっても生計を立てるのは難しいと言われ